

浮気妻の制裁

第六卷 恥辱の末路

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 エレベーターの中の情事

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について
「浮気妻の制裁 第六卷 恥辱の末路」（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。
い。

■ まえがき

隣家に住む主婦、麻子の罊に嵌まり、白昼のマンション内を一糸纏わぬ姿で逃げ惑う若妻の萌々は、マンションの管理人までが自分を追いかけていることを知ると、一か八かエレベーターに乗って逃げようとした。萌々を乗せたエレベーターは最上階の五階からゆっくりと下降し始めると、あろうことかすぐ真下の四階で停まった。四階で突然開き出したエレベーターの扉に一糸纏わぬ若妻は何処にも身を隠すことができず、呆然としながら乗り込んでくる人影を待つしかなかった。

「ウォオッ」

大きな驚きの声を上げて萌々の前に現れたのは、さつきマンション内で遭遇した配送業者の男だった。

男は白昼のエレベーターに乗っている全裸美女に驚きつつ、その美しくも卑猥な体を頭

の 天 辺 から 脚 の 爪 先 ま で 舐 め 回 す よ う に 眺 め
た 。
而 し て 、 欲 情 を 抑 え 切 れ な く な っ た 男 は 若
妻 を 脅 迫 し 、 エ レ ベ ー タ ー を 停 止 さ せ た ま ま
萌 々 の 体 に 襲 い 掛 か り ・ ・ ・ 。
「 あ あ ん 、 あ あ ん 」
若 妻 の 悲 し げ な 喘 ぎ 声 が エ レ ベ ー タ ー 内 に 響
き 渡 り 、 扉 が 閉 ま る と 二 人 を 乗 せ た ま ま エ レ
ベ ー タ ー は ゆ っ く り と 一 階 へ 下 降 し て い っ た
や が て 、 エ レ ベ ー タ ー が 一 階 に 到 着 し 扉 が
開 く と 、 外 で 待 ち 構 え て い た 麻 子 達 が 現 れ 、
配 送 業 者 の 男 は 慌 て て 逃 げ 出 し た 。
見 知 ら ぬ 男 に 襲 わ れ て い る と ころ を 麻 子 達
に 助 け ら れ る 形 に な っ た 萌 々 で あ っ た が 、 本
当 の 地 獄 が ま だ こ の 先 に 待 っ て い る こ と を 若
妻 は 氣 づ い て い な か っ た 。
素 っ 裸 の ま ま 麻 子 達 に マ ン シ ョ ン の 管 理 人
室 へ 連 れ て 行 か れ た 萌 々 は 、 そ こ で 尋 問 を 受
け 、 屈 辱 の 告 白 を さ せ ら れ る 。

事情を何も知らない管理人は美しい若妻の
ことをすっかり露出狂の淫乱女だと思ひ込み
麻子はそんな管理人の前で、萌々に対して恐
るべき新たな奴隷契約を結ばせるのだった。

■ 第一章 エレベーターの中の情事

隣の部屋に住む主婦の麻子の罨に嵌まり、
白昼のマンション内を一糸纏わぬ姿で逃げ惑
う若妻、萌々。
麻子はマンションの管理人を連れて全裸の
若妻を追いかけ、萌々はついに管理人にまで
痴態を目撃されてしまった。
このまま二人に捕まり変態女に仕立て上げ
られることを恐れた萌々は、目の前にやって
来たエレベーターに慌てて飛び乗り、二人の
元から逃げ出した。
しかし、萌々がホツとするのも束の間、五
階から下降し始めたエレベーターはすぐ真下
の四階で停まり、エレベーターの扉が急に開
いたのだった。
素っ裸の萌々は思わぬ事態に心臓が止まり
そうなほどの衝撃を受けた。ああっ、もう終
わった・・・。萌々は両手で胸元と股間を隠

し、絶望感に苛まれながら乗り込んでくる人
影を待った。
「ウォオッ」
萌々の目の前に現れた男は、エレベーターの
中に全裸の女が乗っているのに気づくと、大
きな驚きの声を上げた。
「アンタ、さっきの人だな？」
その男は全裸の女の顔と体に見覚えがあるの
か、エレベーターの隅で震える萌々にそう問
い掛けた。
「ああん、ごめんなさい・・・」
萌々は腰を後ろに引き、男に向かって思わず
謝った。
四階からエレベーターに乗り込んだ男
は、さっき萌々が四階のエレベーターホール
で鉢合わせした四十代くらいの配送業者の男
だったのだ。
どうやら配送業者の男はまだマンションか
ら出て行っていないなかったようで、『開』のボ
タンを押し続けてエレベーターを四階に停止

させたまま、若妻の卑猥な裸身をギリギリした目で鑑賞した。

「アンタ、そんな恰好で一体何してるんだ？もしかして露出狂なのかい？」

配送業者の男は、全裸の女が女優とも見間違う程の美人であると分かると、さらに興奮した様子で萌々に問い掛けた。

「そ、そんなこと・・・」

萌々は俯きながら言葉を濁した。ハッキリと自分は露出狂なんかじゃないと否定したかったが、白昼のエレベーターに素っ裸で乗っているのは全く説得力がないと思ったのだ。

「まあいいや。とりあえず手をどけてアンタの体を良く見せてくれよ」

配送業者の男は萌々のことを露出狂の女だとすっかり思い込んだ様子で、不躰にそう命じた。

「いやあん、そんなことできません」

萌々は配送業者の男が欲情を剥き出しにする
姿に恐れおののき、エレベーターの隅で体を
激しく震わせた。
「それなら今すぐ警察に通報してやろうか？
マンションのエレベーターに裸の女がいます
って」
配送業者の男は自分が圧倒的に優位な立場に
あるのを良いことに、素っ裸の美女を脅迫し
た。
「そんな・・・」
萌々は配送業者の男を思わず睨みつけた。
しかし、萌々のその表情は却って男の加虐
心を煽るものになった。
「よし、それじゃあ警察に通報してやるよ」
男はそう言うどズボンのポケットからスマホ
を取り出し、電話を掛けようとした。
「いやあん、待って下さい！」
男が本気で警察に通報するつもりだと感じた
萌々は、慌てて男を制止した。

「何だよ、それじゃあアンタの体を見せてくれるのか？」
男は片手にスマホを握ったまま、萌々を問詰めた。
「それは・・・」
萌々は両手で体をしっかりと隠したまま、男の問い掛けに答えることができなかった。
「それじゃあ警察に通報するか」
男はそう言うのと、手に持ったスマホで警察に通報しようとした。
「ま、待って下さい！」
萌々はさつきよりも大きな声で男に呼び掛けた。
若妻の切実な叫び声は開いたままのエレベーターの扉から四階の共用廊下まで響き渡った。
配送業者の男は電話を掛ける手を止めると、萌々に向かってもう一度命じた。
「それじゃあサツサと手をどけな」

男の有無を言わせぬ口調に追い詰められた
萌々は、ついに覚悟を決めると、ゆつくりと
両手を体から離していった。
「オオッ」
若妻の美しくも卑猥な裸身のすべてが露わに
なると、男は感嘆の唸り声を上げた。
「アンタ、上げえ体してるな。こんなモノが
見られるなんて、今日はツイてるぜ」
配送業者の男はエレベーターのボタンを押し
たまま萌々の方に近づき、その裸身を頭の天
辺から脚の爪先まで舐め回すようにジロジロ
眺めた。
「ああん、いやあん、そんなに近くで見ない
で・・・」
見知らぬ男に至近距離で裸を鑑賞された萌々
は恥ずかしくて堪らず、脚をガクガク震わせ
ながら許しを乞うた。
「なに言ってるんだよ、ホントは見られて喜
んでいるんだろ。下の方が濡れてきているぜ」

男は笑いながらそう言うと、萌々の下半身を指差した。「いやぁん」慌てて自分の下半身を見た萌々は、秘部から溢れ出した蜜が太股を伝って脚元に滴り落ちているのに気づき、恥ずかしい喘ぎ声を漏らし、た。。「アンタ、やっぱり露出狂なんだな」男が呆れたようにそう告げると、萌々はあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤に染めた。マンションの中を裸で歩き回っている内に感じるなんて・・・。萌々は自分がどうしようもなく淫乱な女に思えて自己嫌悪に陥りそうになった。「姉ちゃん、そしたらそこで体をゆっくり回転させな」配達業者の男がそう言うのと、萌々は命じられるままその場で体を反転させていった。

「そうして、萌々が男に背中を向けると、男はそこで一度制止するよう告げ、若妻の尻を暫し鑑賞した。」

「アンタ、尻もたまんねえな」

男がそう感想を漏らすと、萌々は男の視線から逃れようと思わず尻を左右に振ってしまい、男の目をさらに楽しませた。

「それじゃあもう一度こっちを向くんだ」

若妻の尻を十分に堪能した男はそう言っ、萌々をもう一度自分の方に向かせた。

「ああん、もう許してください・・・」

配送業者の男に乳房や恥毛、それにお尻まで見られてしまった萌々は、頭を下げて許しを乞うた。

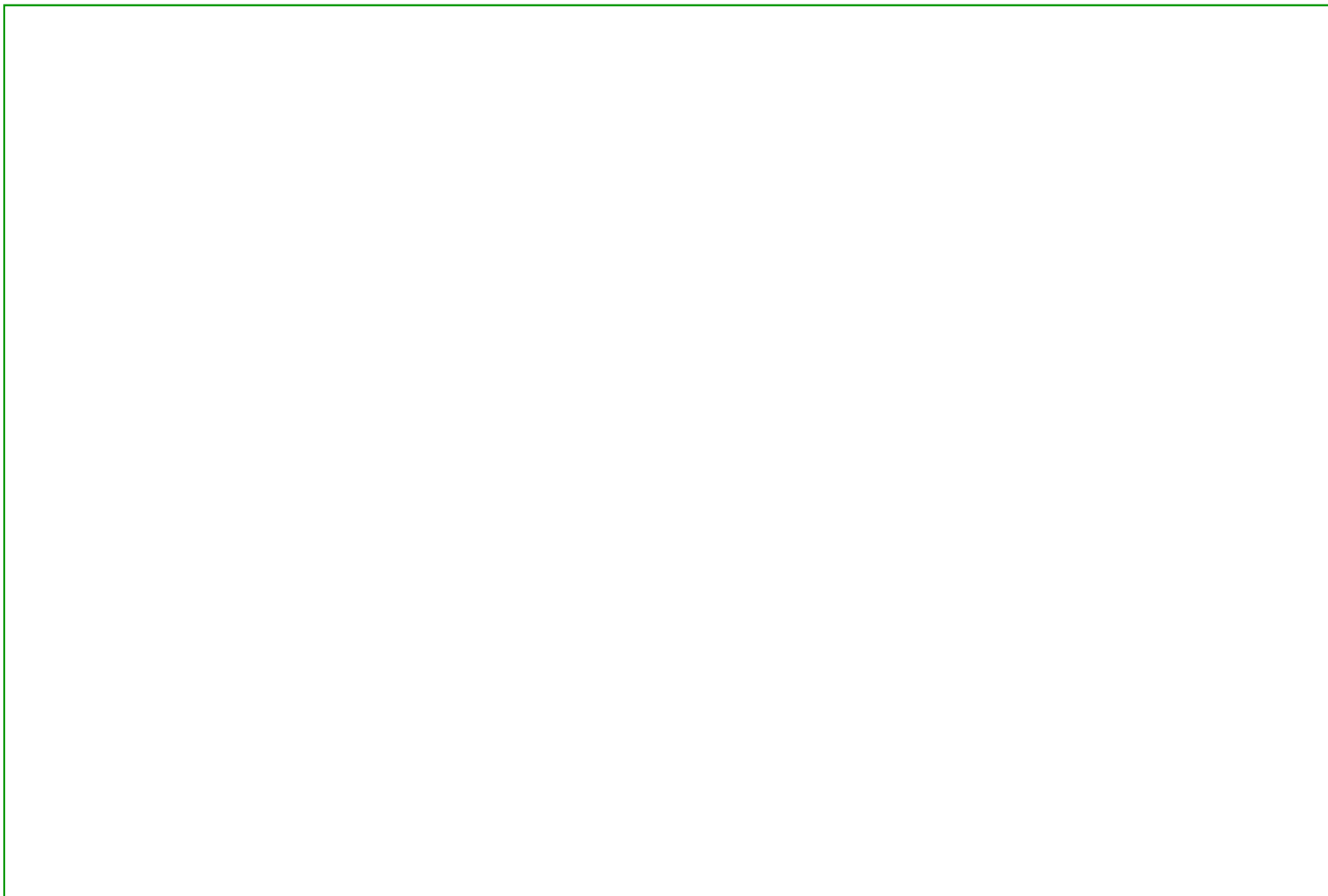
「何を言ってるんだよ。お楽しみはこれからじゃないか」

男はそう言う、スマホをズボンのポケットに戻し、左手でエレベーターのボタンを押したまま右手を萌々の乳房に伸ばした。

「いやあん、やめてください」

男に乳房を鷲掴みされた萌々は咄嗟にその手を払いのけようとした。
「大人しくしないと警察に通報するぞ」
男がそう言っただけで脅迫すると萌々は途端に抵抗するのを諦め、豊満な乳房を黙って男に差しだした。
「ああん、ああん」
見知らぬ男に乳房を好き放題に揉まれた萌々は、エレベーターの中で悲しい喘ぎ声を放つて悶えた。
配送業者の男は全裸の美女が抵抗しないと分かる、と、豊満で弾力のある乳房をその感触を味わうように丹念に揉み続けた。そして目の前で悶え狂う美女の姿に欲情を煽られ、このままエレベーターの中で強姦したい衝動に駆られたのだった。
そうして、ついに欲情を抑えきれなくなつた男は左手をエレベーターのボタンから離し、両手で萌々の体を抱きしめると、その唇に強引に吸い付いていった。

「・・・」
男に唇を奪われた萌々は言葉を発する事もできず、ただ男から逃れようと体をバタつかせるだけだった。
その間、エレベーターの扉は締まり、一階へ向かってゆっくりと下降していった。萌々にはそれがまるで得体の知れない地獄へ堕ちていくように感じられた。
唇を離れた男はズボンのチャックを開けると、中から大きく膨らんだイチモツを取り出し、それを強引に萌々の秘部に押し込もうとした。
「いやぁん、それだけは許して」
見知らぬ男に聖域を侵されることを恐れた萌々は必死に腰を振り乱して抵抗した。
しかし、萌々の抵抗も虚しく、男の大きく膨らんだイチモツは若妻の剥き出しの秘部に挿入され、その瞬間、萌々は絶望と快感の入り混じった何とも淫らな表情を浮かべてエレベーターの天井を仰いだのだった。



■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>